

チベットにおける仏教論理学の系譜

白 館 戒 雲

チベットの仏教では論理学は重要な部門となっている。特にゲル派では、論理学は五つの主要な学習項目（中観学・般若学・論理学・律・アビダルマ）の一つであるばかりでなく、中観学と般若学のための基礎学の側面も持っており、重視されている。この論理学はインドのディグナガ（陳那）の *Pramāṇasamuccaya* (ab. PS) とダルマキールティ（法称）の七論書 *Pramāṇavārttika* (PV), *Nyāyabindu* (NB), *Pramāṇaviniścaya* (PVi), *Hetubindu* (HB), *Sambandhaparīkṣa*, *Santānatarasiddhi*, *Vadanyāya* によって確立された仏教論理学の伝統を正しく受け継いだものとなっているが、それがどのようにチベットに受け入れられ学的伝統が形成されてきたかを、現存のチベット資料に基づきながら跡づけてみる。

1 前期伝播期

チベットにおける仏法の前期伝播期に、法王ティソンデツェン（七四二―七九七）が論理学にも造詣の深いシャーンタラクシタとその弟子のカマラシーラをインドから招いたこと、当時の大翻訳官イエシュエデがダルマキールティの NB に対するヴィニータデーヴァの注釈を、そして大翻訳官ベルツェクが同じダルマキールティの HB に対するヴィニータデーヴァの注釈などを翻訳したという確かな歴史がある。そのことから、前期伝播期にも論

理学の学習がなされていたことが想像できるが、明確な学的伝統は生じていなかった。

2 後期伝播期

(1) カダム派

チベットにおいて論理学の学的伝統を初めて確立したのは、ゴク家系の大翻訳官ローデンシェーラブ（二〇五九―二〇九）の人である。彼は自分の叔父のレービッシュェーラブが一〇七三年に造ったサンブ寺で出家した。それから叔父の教えのとおり、中央インドとカシミールなどにおいて一七年間、顯教・密教・文法学、論理学などを懸命に苦勞して学び最高の学者になった。三才の時にチベットに戻り、カーギェール・テンギェールを十萬頌余り翻訳したのである。その中で、論理学の翻訳のころは、チエデ王が施主となって *Pramāṇavārttikahikāṇikā* (ab. PViA) とダルモータラの PV と HB の注釈などを翻訳した。そしてローデンシェーラブ自ら PVi の注釈を作り学的伝統を確立することによって、非常に貢献をしたのである。その結果「PViA とダルモータラの二つの注釈を教える人は五五人、PVi を教える人は二五五人」と *bka' gdams chos 'byun* にも述べられている。また「シャキヤチョクデン（一二八―一五〇七）のこの伝統は、*chos 'byun* には「大翻訳官（ローデンシェーラブ）のこの伝統は、ダルモータラの PVi の注釈に関してはパラヒタパドラに、PViA に関してはカシミールのバヴィヤラージャに聞いたことははっきりしているが、彼らの前にこの伝統があったこと定かではない」と記されている。また同じその書に「大翻訳官は、『昔の』著作の内容にもあるがまさに正しく明らかにっていないものがある。

論理学の難しい真理をあるがままに大きくここで決断しよう」と著作の誓いをして *PVi.* の注釈と多くの小さい著作を著した。そのように著作したのはチベットにおいて論理学の著作が出た最初であって、他にそれより前にはなかったのである」と書かれている。

ローデンシエラブの最愛の弟子であるドルンパ（ローデージェンネ）は大・小の *bsTan yin* などの著作をなしたが、アクリンポーチエ（一八〇三—一八七五）の *dDe rgyun khon pa'i tho yig* 中にドルンパの *PVi.* の注釈があることが述べられている。サンブ寺のゲーシェであるチャワチエキセンゲ（一一〇九—一一六九）はドルンパから熱心に聞いて、*PVi.* に対する注釈などを作ったことが、シェンヌベル（一三九二—一四八一）の *Deb ther sñon po* に書かれている。また、シャキヤチョグデンの *Tshad ma'i chos 'byñ* には「チャワチエキセンゲは聖教と理に基づいて、すべての教えに関して、説くこと・論争・著作という三つの仕事を多く行なった。その場合に、*PVi.* の論と注釈を解釈の根本にした」などと記されている。彼はサンブ寺でダルマキールティの論理学の七つの論書をまとめて、経量部の正理に合わせて *bsDus grva* というテキストを作り、「*bsdus grva*」という方法を創始した。

チャワチエセンゲの八大直弟子の一人であるツァンナクのツェンドゥセンゲは *PVi.* の注釈 *Lags bsad bsdus pa* を書いたが、それがウメー体の写本として大谷大学に蔵されている。これはローデンシエラブの学的伝統を伝える唯一の現存のものであり、近年、大谷大学より影印出版された。以上のように「ローデンシエラブに始まるカダム派の論理学の伝統は、*PVi.* を中心

としたものであった。（これは、*PVi.* が *PV.* と比較して簡潔で理解し易かったためではないかと思われる）

(2) サキヤ派

サキヤ派の論理学は、カシミールのパンチェンであるシャークヤシェリー（一二七—一二二五）から始まる。一二〇四年にトープの翻訳官ジャムペーベルがそのパンチェンをチベットに招ぎ、彼からサキヤパンディタ（一一八二—一二五一）が論理学を学んだのである。そのことは *Tshad ma'i chos 'byñ* の中に「サキヤパンディタは一七才の時に *PVi.* を中心にして研究しそれを究めた。二七才の時にカシミールのパンチェンに会って初めてダルモータラの論理学を聞いて以来、論理学の七論書にチベットの解釈が混ざり込まないように、他のパンディタからも聞いて、*PVi.* の翻訳を校訂して、一日少なくともそれを一度は説くことを誓った。〔その結果〕*PVi.* を広め盛んにすることが出来る弟子達が多く出てきた。以前に著された論理学の *bsDus grva* の解釈は論理学のテキストと一致しないことを知って、経量部・唯識の考えを元にしてまとめる方法を初めて行って、*Tshad ma rig pa'i gter* を注釈と共に著した」と記されている。

サキヤパンディタの直接の弟子であるウユクパ（一一二五—一二五三）は論理学において非常に重要な人物である。*Deb ther sñon po* の中に「ウユクパはサキヤパンディタから *PV.* を聞いてそれを教えたので、シャンのドーデーパルなどの弟子が多く出た。これまでに *PV.* が盛んとなったのはパンチェンと彼ら二人（サキヤパンディタとウユクパ）のおかげである」と述べられている。彼の著した *Yñam 'grel rigs mdsod chen mo* が最近インドで出版されているが、これはこの派の学的伝統を伝える唯一の現存の資料であ

る。

この後、この派の論理学の伝統はシャンのドーデーベル、チョレーナムギヤル、ニャベンクンガーなどを経てレンダーワ（一三四九—一四一二）に伝わるのであるが、いずれも *PV.* を中心としたものである。

以上のように、シャーキャシュリとサキャバンディタに始まるサキャ派の論理学の伝統は、それまでの *PV.* から *PV.* を中心としたものに転換している。

(3) ゲルー派

ツォンカバ（一三五七—一四一九）に始まるゲルー派は新カダム派とも呼ばれ、宗派としてはカダム派の流れを汲むが、論理学の伝統に関しては少し様相が異なる。ゲルー派の伝統はサキャ派のレンダーワに始まる。それもさらに遡れば、彼の師であるニャベンクンガーとその師であるチョーレーナルギヤルに至る。レンダーワに関しては、ヨンシンエーシーギヤルシェンの *Lam rin bla bryud nam thar* の中に「レンダーワはニャベンクンガーベルとサンゲーベルワの二人について *PV.* を学び、汚れない理論によって論理 (*tarka*) の八句義を正しく理解して大学者の名声を博した。その後、七論書と *PS* やその注釈を学び、大学者で自在者のサキャバンディタとウクバの著作もよく見て、吉祥なるダルマキールティのテキストを誤りなく理解して、*PV.* の大小の二つの注釈と概論を著した」とある。

そのレンダーワにツォンカバ（ローサンターワ）は論理学を学んだのである。（チベットにおいては宗派の意識は厳格ではなく、学問をする場合自由に師を選んでいる。）そのことは彼の弟子のケートツプの *rNam thar dad pa'i 'jug nogs* の中に「ツォンカ

バは詳しい論書である *PV.* のその自註を詳しく説いてくれるように「レンダーワに」お願いして、一度聞いた。そしてウクバの *PV.* の注釈 *Rigs mdzod* を見て、第二章での道の確立を説いている所を見ることによって、ダルマキールティのテキストと理論のやり方に対して無量の、強い、押さえても押さえきれない信が生じた」と書かれている。またツォンカバ自身も自伝詩 *Togs brijod mdun legs ma* の中で「この北国〔チベット〕では、論理学の書を学んだ人も学んでいない人も、その多くは異口同音に、『集量論』(*PS*)や七部論のどこにも悟りに向かう実践の順序は説かれていない、と言う。……しかし、『先に述べたような』そういうことが間違った主張であることがはっきりわかった。……」（ツルティム・ケサン、小谷信千代共訳『アーラヤ識とマナ識の研究』pp. 129-130）と述べている。従ってチベットにおいては、ツォンカバに至って初めて仏教における論理学の意義が正しく積極的に認められたのである。

チベットの学者達の中で、*PS* と論理学の七論書を完全に習得したのは、タルマリンチェン（一三六四—一四三二）その人であると断定できる。それは彼自身の論理学の正しい解釈によって知られるところである。彼は初めレンダーワの弟子であったが、後にツォンカバの弟子にもなった。彼は *PV.* に対する大部な注釈を初め論理学のテキストに対して多くの注釈を書いているが、すべて勝れたものである。以後それらは現在に至るまでゲルー派の論理学の学習の最高の依拠となっている。（さらには今後、ディグナーガやダルマキールティの論理学の研究に重要な資料となるものと思われる。）また、彼はツォンカバの見いだした論理学の意義を確立するために、*Tshad mae'i lam bhrad* を著し、

論理学のテキストに説かれた意味を道の次第と結び付けることを初めて試みている。

以上のようにツォンカバは師のレンダーワを通してサキャ派の論理学の伝統、即ち P.V. を中心とする論理学の伝統を受け継ぎ、それが彼ら二人の弟子であるタルマリンチェンによって確立されたと見ることが出来る。

(付記 日本語に直す段階で同僚の兵藤一夫氏の助力を得た)

(本学専任講師 仏教学)

仏典の料紙について

高橋 正隆

『歎異抄』の底本として、蓮如上人が書写したと伝えられる西本願寺所蔵本や大谷大学図書館所蔵本の一本の永正本が用いられている。両本とも由緒をとどめた善本のゆえに校訂を加えて刊行されたものが多い。大谷大学図書館には、端坊旧蔵本としてもう一本の書写本永正本とともに二部の『歎異抄』の古写本を所蔵している。ところで、厳密な校訂を重ねて底本が作られてしまうと、原本に注意する機会は稀薄になってしまうことを恐れるものである。端坊本の『歎異抄』は、淨書ののち、本文を一部分消去のうえ修正した個所がみかけられることである。端坊本が修正された部分は、ほぼ全体に見られることから、異本との比較の結果として修正されたものと見るべきであろう。そして、このことは修正した個所の筆蹟はすべて同筆であることによってあきらかである。ごく一部分ではあるが、前筆と同筆のところもあることから二度にわたって修正のあったことを推定できる。同筆の部分については異論が無いとして、異筆の個所は修正される以前はどのような文章であったか注意しなければならない。すなわち、端坊本『歎異抄』は、修正以前のままで他本との間にどの程度の違いがあったか、そして、いつ頃どのような理由で広範囲におよぶ修正を加えられたものか、定本のできる経緯を知る手がかりとなるからである。文献の訂正にあたっては、みせけち、朱墨などによって試みられるのが知られていたが、元の文字を消して改めると